

大阪女学院短期大学 2009 年度事業報告書

(2009 年 4 月 1 日から 2010 年 3 月 31 日まで)

学校法人大阪女学院

2010 年 5 月 26 日

I. 建学の精神・教育理念、教育目的・教育目標

大阪女学院短期大学は1968年4月に開学しました。1987年および1998年の2度にわたるカリキュラム改革を行うとともに、1998年に、社会に積極的に関わる人間の形成を教育の使命とするミッションステートメントを制定しました。現在、2011年度に導入する第3次カリキュラム改革に取り組んでいます。また、学院は、1884年にウヰルミナ女学校として創立され、2009年度に125年周年記念の年を迎えました。

ミッションステートメント

本学は、キリスト教に基づく教育共同体である。
その目指すところは、真理を探究し、自己と他者への尊厳に目覚め、
確かな知識と豊かな感受性に裏付けられた洞察力を備え、
社会に積極的に関わる人間の形成にある。

1. 新入生オリエンテーション

オリエンテーションは、大阪女学院短期大学での学習を始めるにあたり、建学の精神や教育理念、教育目的・教育目標、教育課程について一定の理解をした上で、高校までの学びから大学での学びにギアチェンジし、学生が主体的に行動できるための意識を立ち上げてスタートをきるための導入プログラムである。

オリエンテーション期間中に行うオーバーナイトオリエンテーションは、一泊二日の合宿プログラムであり、新入生同士やBig Sister(2年生奉仕者)、スタッフと、体験、期待、希望、不安などを分かち合い交流を深めるとともに、大阪女学院短期大学を自分の学びのステージとして認識していく場でもある。

1) オリエンテーションの主なプログラム 期間：2009年4月4(土)～11日(土)

- a. オリエンテーションのねらい
- b. カリキュラムについて(含 海外プログラム)
- c. キリスト教教育について
- d. 教職課程 / 編入学 / 留学について
- e. チャペルオリエンテーション
- f. 学生サポートについて(学生生活、相談システム、キャリアサポート)
- g. マネジメントスタッフの役割
- h. Learning Resource Center / Computer-Assisted Language Learning について
- i. 図書館ツアー
- J. BS(Big Sister)アワー
- k. 2分間スピーチ
- l. Placement Test
- m. 学友会より(学生自治会案内、クラブ紹介)
- n. 自宅外通学生の集い(対象者)

2) オーバーナイトオリエンテーションの主なプログラム 期間：2009年4月6日(月)～7日(火)

- セッションⅠ：「ここでどう学ぶか」教養教育、英語のカリキュラム構造、学習動機の重要性
セッションⅡ：「Passport to English」-英語で楽しむプログラム
セッションⅢ：「大阪女学院の常識クイズ！」
セッションⅣ：「ビッグシスター・アワー」
セッションⅤ：「学びの自己点検」
セッションⅥ：「まとめ／1年後の自分への手紙／アンケート」

3) 2分間スピーチのテーマ(新入生が選択する)

- a. 自分への期待
- b. 大学生活の目標
- c. 学習面での目標
- d. これから私を支えるもの

この一連のオリエンテーションを通して、新入生は本学での学習の目標をまとめ、オリエンテーション最終日に、25名程度のグループの中で2分間スピーチを行い、翌日からの授業へと向う。

オリエンテーション終了時のアンケートでは、新入生136名のうち132名(回収率97.1%)の回答があり、「大学生活を送る上で必要な情報を得ることができましたか」と問いに、87.9%が「得ることが出来た」と回答し、「大阪女学院大学で有意義に学習を進めるためには何が必要だと、今、感じていますか」(準備された語群から5つまで選択できる)の問いに、回答者が選択した言葉は「復習」(62.1%)、「予習」(52.3%)、「勤勉」(49.2%)、「計画性」(42.4%)、「視野の広がり」(40.9%)、「熱意」(37.1%)、「要領」(37.1%)、「好奇心」(26.5%)、「思考力」(22.7%)、「手際の良さ」(16.7%)、「読書」(16.7%)、「勇気」(15.9%)、「情熱」(15.2%)、「愛」(14.4%)、「情報」(10.6%)、と続く。

また、「大阪女学院大学での学生生活で、自分の成長に何を今、期待しますか」(同上)の問いに、回答者が選択した言葉は「語学力」(64.4%)、「口語表現力(外国語)」(54.5%)、「思考力」(28.8%)、「文章表現法(外国語)」(22.0%)、「知識量」(21.2%)、「自己理解」(18.2%)、「他者理解」(15.2%)、「人間関係の技術」(13.6%)、「知的センス」(12.9%)と続く。

2. 導入教育科目「学ぶこと、働くこと」について

社会を形成する価値が世界的な広がりで見られ、他方では、伝統的な価値への回帰が叫ばれる現状で、青年達の間では、フリータリズムが増殖し続けている。このような社会において、大学で学ぶことの意味を問い、さらに卒業後の社会で働くことの意味を考えるのがねらいである。1年次必修の通年科目であり、導入教育として位置付けている。授業を受け考察を進めて、年度末に「大学で学ぶということ」をテーマに自らサブテーマを決めて2,400字の小論文にまとめる課題に取り組んでいる。

3. キリスト教教育

キリスト教教育は、必須科目「キリスト教学」、選択科目「キリスト教と世界」及び、礼拝、リトリート等の行事を軸としている。2009年度の卒業アンケートによると、「本学の理念が自分自身の成長に影響を与えたと思いますか。」との問いに、47.8%が「影響があった」と回答している。一方、「キリスト教関係のプログラムは、あなたの成長にどのような影響を与えましたか。」との問いには、28.0%が「影響があった」と回答しているに留まっている。

かねて、Elder 名誉教授が投げかけた「学生の自己概念に影響を与える意味で成功していると言えます。…いまの傾向が続けば、…ほとんどの学生が自分の生き方を考え、見つめ、選ぶ材料としてキリスト教のことは全くと言ってもいいほど、知らなくなるでしょう。…いまの時代、いまの状況の中で、いまの学生に関わり、共にキリストをどう伝えればいいのか」という言葉を、自らの課題として問いつづけなければならない。

2008年度に引き続き、今年度の礼拝に100回以上出席した学生を対象に、顕彰をおこなった。今年度の該当者は、2年生2名、1年生10名であった。

4. 人権教育

人権教育講座を10月21日(水)～11月4日(水)に開催した。これは、導入プログラム、オープニングプログラム、2日間の分科会、クロージングプログラムを5日間にわたって二年制、四年制の

1・2年生を対象に共同で行なう講座である。2009年度も14のテーマ別各分科会を開講した。

学生の受講率の向上を計るため、2009年度より導入プログラムを新たに実施し、これまで2年間で2単位を認定していたが、これを年度毎の受講で1単位を認定することとした。しかし、1・2年生を併せて、完全出席者が77名(28.4%)と、昨年度の89名(30.8%)を下回る結果となり、今後課題を残した。

5. 学期末レビュー

1学期間の学習を経た学期末に、1年生一人ひとりが自ら、当該学期間の学習の意味を振り返り、次の学習に向かう姿勢を得ることを目的として、学期末、定期試験の最終日に実施しているプログラムである。今年度より「学ぶこと、働くこと」「大学と自己形成」授業の一環として取り扱い、ほぼ全員の参加が実現した。

1) 春学期：8月14日(金) レクチャー 講師：中垣学長代行、井上教授

2) 秋学期：2月10日(水) ワークシートを使って(グループワーク)

レビューの視点(抜粋)

- a. 秋学期、これはできたと思うこと、できなかったと思うこと
- b. 新しい自分の発見はありましたか(良い面、良くない面を含めて)
- c. 自分の関わった人(友達、家族、先生 など)との出会い、またある本を読んで、ある社会的出来事を通して気づいたことで、自分が変わったと思ったことや、さらに、成長できたと思うことはありましたか。それはどのようなことでしたか。
- d. これからの自分の目標は—このようになりたいと思う自分をイメージして具体的に書いてみましょう

6. 講師オリエンテーション

1) 英語担当者ワークショップ

専任及び非常勤講師を含む総ての英語教育科目担当者全員が集い、2009年4月1日(水)にオリエンテーションを開催した。英語教育科目担当者用カレッジカタログ(授業担当マニュアル)を基に、各学科目のリエゾンより授業の概要、目的、到達目標、評価方法など授業展開及び学生指導の方針についての説明と、具体的な授業運営についての打合せを行った。

2) 講師オリエンテーション、ファカルティ・デベロップメント

特任・非常勤講師を対象に、2009年10月3日(土)に講師オリエンテーションを開催し、「高等教育をめぐる動向と大阪女学院大学・短期大学の課題について」と題したFDを行い、続いて2010年度の本学の教育展開についての説明ならびに意見交換を行った。

7. 学院創立125周年

1) 学院創立125年式典を、御来賓、学生および教職員の参加により、2009年10月8日(木)に大阪国際会議場で開催した。

2) 建学時の精神や125年にわたる生徒、教職員の足跡に関わる書誌を刊行した。

a. ウキルミナ物語 大阪女学院創立125周年記念誌

b. Twenty-Five Years in Japan 1902年、J.B.ヘール

c. LIFE IN JAPAN 1900年、E.ガードナー

d. 大阪女学院創立125周年記念行事

—生徒・学生による共同絵画— 生徒・学生からの言葉集

e. 国際共生研究所叢書1 国際社会への日本教育の新次元 今知らねばならないこと

II. 教育の内容

英語科の教育課程は、自己の確立群、語学基本群、コア基本群、コア展開群、表現・コミュニケーション群、専門職業群の各学科目群から構成されています。

教育課程の構成と各群のねらい

- 1) 自己の確立群(必修科目 12 単位): 人間一般論としてとらえるのではなく、あくまで「自己」という固有の存在に対する気づき(awareness)の獲得をめざし、新しい自己への飛躍を図る。
- 2) 語学基本群(必修科目 6 単位、履修要件科目 1 単位、選択必修科目以上 4 単位): 「言語を使う」ことを第一目標に多面的に学習する。四技能(読む、書く、聴く、話す)を、さらに綿密に構成されたプログラムで向上させ、「英語で学ぶ」ことに直結させる。
- 3) コア基本群(必修科目 15 単位): 英語「を」学ぶことと、英語「で」学ぶことを一体化させる。そのため、考えるという知的活動を活発にしなが、英語の運用能力を向上させ、興味、関心のある学問分野についてさらに深く学んでいける基礎知識や研究方法を身につける。さらに世界に開かれた視点から異文化を受容する態度をもつ。
- 4) コア展開群(必修科目 12 単位、選択必修科目 6 単位以上): 21 世紀の人類社会が直面するさまざまな問題の根底に潜む構造に目を開き、新しい世代としての可能性に目覚める。
- 5) 表現・コミュニケーション群(必修科目 3 単位): 論理的探求および分析的思考の基礎的条件である情報の解読やグローバルな広がりの中で生産される諸情報へのアクセスの方法を獲得し、またその結果の管理方法について学ぶ。
- 6) 専門職業群: 21 世紀を迎え、社会のグローバル化が進むなか、世界に通じるビジネスの担い手としての仕事を実現できる基本的能力を形成する。

1. カリキュラム改革

2011 年度入学生から導入する改訂カリキュラムの検討を進めている。改訂の主旨は、以下のとおりである。

- 1) 建学の精神・教育理念に基づいた「養成する人材像」を明確にした「短期大学士課程教育」を構築する
- 2) 教育課程の体系を「人材養成」へのロードマップとして明確にする
- 3) Learning outcomes「学生は何が出来るようになったか」を明確にする
- 4) 国際教養に関するコンテンツをベースとし、読む、聴く、書く、話すの四技能を統合した、教養教育と英語教育を組み合わせる教授法は継承しつつ、新たな教育方法を開発する
- 5) キャリア形成との連関による資格取得科目を設定する

2. 学生の積極的な参加による授業展開を実現する少人数クラス編成

2009 年度の開講科目数は、155 科目であり、開講クラス数の総数は下表のとおり 479 クラスである。内 30 人以下で実施されているクラスは 423 クラス(88.3%)、20 人以下のクラスは 262 クラス(54.7%)である。

なお、100 名以上のクラスは 1 学年全員で受講する必修科目であり、その授業展開はグループ別学習や個人面談を組入れた工夫をしている。

| 受講者数 | クラス数 |
|---------|------|
| 1～10 名 | 125 |
| 11～20 名 | 137 |
| 21～30 名 | 161 |
| 31～40 名 | 40 |
| 41～50 名 | 10 |

| | |
|---------|-----|
| 51～60 名 | 3 |
| 61～70 名 | 1 |
| 71～80 名 | 0 |
| 81～90 名 | 0 |
| 100 名以上 | 2 |
| 計 | 479 |

四年制との共通科目は、四年制受講者数を含む

3. 英語を使用言語とした教育課程

語学基本群 11 単位、コア基本群 15 単位およびコア展開群必修科目 12 単位の計 38 単位(卒業要件の 61.3%)の授業は、英語を使用言語とした学習を行っている。

4. 海外プログラム

2 月下旬から約 3 週間の期間で実施した異文化間リサーチ演習(ニュージーランド)には 17 名の学生が参加した。また、2008 年度は応募者数が定員に達せず実施できなかった「地域研究-ハンガラデッシュ」は、2009 年度には 7 名の学生が応募し、2 年ぶりにチャントラゴーナ・クリスチャン・ホスピタルでの体験学習を実施した。

また、台湾 Yuan Ze 大学と合同で実施する Intensive English Program を、今年は大阪で開催し、Yuan Ze 大学から 20 名、本学から 20 名の学生が参加し、英語によるコミュニケーションを通じて、交流を深めた。

5. 履修指導と関係規程の整備

2009 年度末、2 年間で卒業要件単位を修得できず留年が決定した学生は 42 名で、決して少数とはいえない状況である。この状況を踏まえ、再試験対象者や評価が Incomplete(保留)^{注1}となった学生を対象に教務面談をおこなうなど、学習サポートの充実を計った。

また、今年度からアドバイザー制度を導入し、新入生を対象に学習への取組だけでなく学生生活全般における支援を実施した。アドバイザーアワーへの参加率の低下など、制度を定着させるための課題を残すが、学生一人ひとりとコミュニケーションをとりつつ、今後も支援態勢を整備する。

注1: 春学期と秋学期に継続して履修し、春・秋両クラスでの学習の継続性を前提としている授業科目において、春学期クラスの評価が 60 点に満たない場合、秋学期クラスの学習成果をもって春学期の成績を再評価する制度

III. 教育の実施体制

1. 教員組織

2009 年度の教員組織は以下のとおりである。(2009 年度秋学期)

| | | |
|------|--------------|------------|
| 教授 | 6 名 (2 名) | |
| 准教授 | 4 名 (2 名) | |
| 専任講師 | 3 名 (1 名) | |
| 兼任講師 | 127 名 (24 名) | ()内は外国人教員 |

2. 教育組織

教育組織は四年制と統一した体制をとり、Academic Coordinator の下、Liaison, Team Leader が各群・科目・クラス間の授業展開、学生指導、成績評価などの調整をおこない、教育の質の維持・向上を図っている。

1) Academic Coordinator

中垣

2) Liaison

a. 1 年次英語必修科目

| | |
|-------------------------|----------|
| Core Studies I | Johnston |
| Core Studies II | 稲田 |
| Core Studies III | verity |
| Phonetics (Coordinator) | 米田 |
| Grammar | 寺 |

b. 2 年次英語必修科目

| | |
|--------------------|------------|
| Topic Studies I・II | Swenson・加藤 |
| Topic Studies III | Fujimoto |

c. 語学基本群

| | |
|-------------------------------------|----------|
| Computer Assisted Composition | Johnston |
| Computer Assisted Speed Reading | 稲田 |
| Public Speaking | Verity |
| Debate | Swenson |
| Listening for Professional Purposes | Verity |
| Vocabulary through Reading | 稲田 |
| Oral Interpretation (Coordinator) | 米田 |
| Grammar Essential | 寺 |
| English Essential | Verity |
| English Strategies | 加藤 |

3) Team Leader

| | |
|----|----------|
| a1 | Cline |
| b1 | Verity |
| c1 | 中垣 |
| c2 | 肴倉 |
| d1 | Fujimoto |
| d2 | Johnston |

3. 新図書館(仮称)建築計画

新図書館建築にむけて学院に建築委員会を設置し、設計施行業者を決定するなど計画を作業を進めた。

4. CALL 施設・設備の更新

CALL関係施設は2010年3月に機器の全面更新を行い、短期大学エリアについて405/406教室および情報検索スペースに、基本ソフト Windows 7 と Office 2007 を搭載した端末 84 台を設置した。

IV. 教育目標の達成度と教育の効果

1. 授業の実施と学生の参加状況

2009年度の開講科目・クラスの開講予定回数に対して、実際の実施回数は96.5%であり、昨年度(96.8%)とほぼ同等であった。

全学生の、全授業への出席率の平均は83.8%であり、2年連続して80%台前半に留まっている。

これは、特に大阪を中心とした近畿圏において厳しい雇用情勢が続く中で、就職活動に時間を要する2年生の出席率が77.7-78.3%の範囲に留まっていることによる。

1年生は88.3%と、2008年度比0.9ポイントと、従来とほぼ同水準で推移している。

2. 単位修得および卒業等の状況

2008年度入学者146名の所定年次における卒業有資格者は104名(対入学者数71.2%)、退学者数は12名(同8.2%)、除籍は2名(同1.4%)、卒業延期者数は28名(同19.2%)である。なお、2009年度は全国的な経済状況の悪化、近畿圏・大阪府下における雇用環境の悪化の中、就職活動を継続して行うことを希望する卒業有資格者に対する「卒業保留」の制度を設け、20名(同13.7%)がその制度を利用して在学している。卒業生84名(同57.3%)の修得単位数平均は68.0単位であった。

退学12名の事由を見ると、就学意欲の低下1名、進路変更3名、経済的困窮3名、身体疾患3名、心身耗弱1名、結婚1名となっている。除籍の事由は、学費未納1名、音信不通1名である。

3. 学生の評価から見た教育成果

2009年度末に実施した卒業生アンケートにおいて、「大学は学生の能力や個性を活かす機会を与えているか」との設問に対し、回答者136名の内、75.0%が「はい」と回答している。

教養教育と英語教育を統合した英語教育科目英語展開群において、2009年度末に実施したアンケートにおいて、1年生への「テーマについての関心や知識が広がったか」との設問に対し、回答者115名の内、64.6%が「広がった」と回答している。テーマ別に見ると、「平和の追求」67.0%、「科学と宗教」58.3%、「現代と人権」70.0%、「生命の危機」63.5%であり、「科学と宗教」というテーマが学生にとって十分な理解が伴っていないことが読み取れ、教材や授業展開に工夫が必要であることを示している。一方、日本語で行う集中授業「人権教育講座」を実施する時期をリンクさせている「現代の人権」での数値が最も高いことは、背景知識の導入や学習動機の立ち上がり、英語教育科目英語展開群の学習成果に影響していることを示している。英語運用能力については、読む力、話す力、書く力、聴く力の向上について、それぞれ70.0%、48.7%、62.6%、59.1%の学生が「向上した」と回答している。話す力の向上にはまだ満足できていないことが分かる。2年生に同様の設問をすると、216名の回答の内、読む力、話す力、書く力、聴く力の向上について、それぞれ85.2%、70.4%、88.9%、75.5%の学生が「向上した」と答えている。

同じく、2年生への「現在の世界の事情についての知識が増した」「同 関心が増した」との設問に対し、回答者103名の内、それぞれ98.1%、99.0%が「そう思う」と回答している。

2009年度に実施した人権教育講座において実施したアンケートでは、参加登録者(二年制・四年制)365名のうち276名(75.6%)が回答し、導入プログラムについて67.0%、分科会について93.1%が、「自分にとって意味があった」と答えている。

2009年度末に実施した卒業生アンケートにおいて、「学生はリーダーシップ養成の機会に恵まれている」との設問に対し、回答者136名の内、75.0%が「はい」と回答している。また同アンケートで「理念に近いキーワード」を問うたところ、「自立」「努力」「共生」「学び」といったキーワードが、寄せられた回答数55件中36件あり、本学での学習や体験の中で意識されていることが判る。

4. 英語運用能力の伸び

2009年度卒業生が卒業前に到達した平均点は、455点であった。全体の英語運用能力が入学時の平均366点から89ポイントの伸びである。「TOEIC テスト DATA&ANALYSIS2008」(財団法人国際ビジネスコミュニケーション協会 TOEIC 運営委員会)のデータと比較すると、大学2年生の平均スコア431点はクリアし、日常生活の上で英語を使用(1%~100%)する受験生の平均スコア445点を10ポイント上回る。また新入社員受験者の平均スコア456点とほぼ同等のスコアである。

学内で比較すると、前年度より到達点は23ポイント下降しているが、伸びは13ポイント向上している。

TOEIC等の学外のテストを英語運用力の計測に利用することは、学習成果を一般社会のデータと比較できる反面、本学が進めるコンテンツベースの教授法による英語教育の学習成果全体を測定可能かどうかという懸念や、学生の英語コミュニケーション能力獲得の実感との差異があり、本学独自の新たな測定方法の開発を進めている。

5. 図書館の利用から見た教育成果

学生の学習姿勢の傾向を示す指標のひとつとして、図書館での館外貸出冊数の1人あたりの年間平均を見ると、2009年度は31冊であり、これを日本図書館協会発行の「図書館年鑑2009」による、国立大9.4冊、公立大13.9冊、私立大7.4冊、短大4.8冊と比較すると、本学学生の学習努力を一定示していると考えられる。しかし、従来の平均32-42冊を下回る結果となった。

6. 学外コンテストへの参加と受賞

1) 第43回大阪市姉妹都市英語スピーチコンテスト

2009年9月27日(日)に大阪国際交流センターで行なわれた、第43回大阪市姉妹都市英語スピーチコンテストに、1年生の佐々井彩さんが出場し、大阪・シカゴ協会会長賞を受賞した。

2) 第53回近畿・大阪私立短期大学英语弁論大会

2009年12月5日(土)に京都外国語短期大学で行なわれた、第53回近畿・大阪私立短期大学英语弁論大会に、本学より2名の学生が出場し、2年生の中村桃香さんが第1位、1年生の高橋喜美子さんが第2位に受賞した。

V. 学生支援

1. 入学者の受け入れ

2010年の入学者数は、103名であった。現在、短期大学の募集環境は英語などの教養系に限らず、保育など資格系においても短期大学への進学意識は低下し、非常に厳しい状況である。2010年度入試ではじめてAO入試を実施し、16人の入学者を得た。

1) 広報活動状況

| 掲載日 | 新聞社 | 掲載状況 | 記事内容 |
|----------------|-------------------|-----------|--------------------------------|
| 2009.9.23.(水) | 読売(記事) | 記事 | 大学 英語力を育てる |
| 2009.9.26.(土) | THE DAILY YOMIURI | 記事 | 大学関西フォーラム |
| 2009.10.7.(水) | 読売 | 全五段(広告) | 英語力で、わたしが変わる。英語力が、世界を変える。 |
| 2009.10.17.(土) | 読売 | 全七段(広告) | 英語力で、わたしが変わる。英語力が、世界を変える。 |
| 2009.11.1.(日) | 産経 | 記事 | AO入試で大阪女学院大学 |
| 2009.11.23.(月) | 朝日 | テレビ欄(広告) | 確かな力が身につく大学 |
| 2009.11.28.(土) | 読売・毎日・産経 | 半五段(広告) | 同上 |
| 2009.12.9.(水) | 読売 | 記事 | 入学前教育大学苦心 |
| 2009.12.26.(土) | 読売 | 半七段(広告) | 本気で、英語に取り組む大学 本気で、英語で取り組む大学 |
| 2010.1.17.(日) | 産経・読売 | 半五段(広告) | 特別給付奨学金制度を新設 |
| 2010.1.18.(月) | 朝日 | 同上 | 同上 |
| 2010.1.24.(日) | 朝日 | 同上 | 同上 |
| 2010.2.19.(金) | 朝日 | 同上 | 同上 |
| 2010.2.20.(土) | 読売 | 見開き三段(広告) | 継続教育記事下広告 |
| 2010.3.21.(日) | 毎日・産経・朝日 | 全15段(広告) | 「真面目」力、開花宣言。 |
| 2010.3.22.(月) | 読売 | 同上 | 同上 |

ほか、連合広告数回掲出

2) 入試説明会

a. 進学相談会

受験生との接触の機会をできるだけ多くもつことを目標として実施している(2009年度107高等学校(うち模擬授業42回)、57会場で開催。アドミッションセンターのほか、他部署スタッフも動員し、本学の教育内容を直接説明し、理解してもらうことに意を用いている。

b. 高校進路指導担当者、英語担当者への説明会

本学の教育内容を明確に伝達するための機会として、本学において実際授業を見学することに加えて、場所を変えて教育内容や方法を紹介する説明会を開催した。

<2009 年度入試実績>

| 会場名 | 開催日 | 出席数 | 主なプログラム内容 |
|--------------|----------|-----|--|
| スイスホテル南海大阪 | 6月23日(火) | 16名 | 公開授業 カリキュラムの特色紹介 教養教育の紹介、キャリア支援の紹介 進路実績の紹介、学生募集について |
| ホテルグランヴィア大阪 | 6月24日(水) | 19名 | |
| ホテル京阪京橋 | 6月26日(金) | 8名 | |
| ホテルグランヴィア大阪 | 6月30日(火) | 25名 | |
| ホテルグランヴィア和歌山 | 7月1日(水) | 6名 | |

3) 高校訪問

近畿圏内の高校および受験実績のある圏外の高校を中心に、スタッフ(Teaching Staff と Management Staff)で担当校を設定して訪問した。訪問目的は、在学生の近況報告、直近の入試案内。2009 年度訪問校は延べ 262 高等学校。

今後の課題でもあるが、効果的な訪問展開を実施するため、地域別・高等学校進路指導別の訪問校および訪問時期の分類が必要である。

2. 事前学習

入試合格者には、入学後、本学での学習への取り組みをスムーズにするため、オリジナル教材(CD)等と課題図書を送付している。

3. 学習支援

1) Self Access & Study Support Center: SASSC(学習支援センター)

SASSC(学習支援センター)は、「学生が主体的に学習を進めること、本学の教員と接する機会を増やすこと、周りの学生と協力して学習すること、学習の振り返りを行うこと、学習時間を確保すること、意欲的な目標に挑戦すること、様々な考えや意見を尊重すること」を目的として、「Writing Center」「Tutoring」「Vocabulary Building」「Grammar Exam Workshop」「Phonetics 理論・Exam Workshop」「Reading Exam Workshop」の 6 プログラムを行った。

a. Writing Center

Writing center は、Writing スキルの向上を目的として、英語ペーパーのテーマやアイデアの組み立て方・書式・添削の支援を行った。曜日・時間・担当者は以下の表のとおりである。

利用件数は、春学期 306 件(前年 134 件)、秋学期 161 件(前年 59 件)であった。この利用件数から本学においてペーパー課題が多いことと、課題を課した授業担当者が利用を促す案内をしたことが伺える。しかしながら、利用件数に対しての利用学生数を見てみると、一度利用した学生がその後も利用している傾向があることがわかった。今後はより多くの学生が利用することが望まれる。

| 春 | 時間帯 | 担当 | 秋 | 時間帯 | 担当 |
|---|-------------|----------------|---|-------------|----------------|
| 月 | 16:30-19:30 | Merritt Aljets | 月 | 16:30-19:30 | Merritt Aljets |
| 火 | 16:30-19:30 | Jamie Anderson | 火 | 16:30-19:30 | Jamie Anderson |
| 水 | 17:00-20:00 | Brett Gross | 水 | 17:00-20:00 | Brett Gross |
| 木 | 16:30-19:30 | Craig Hagerman | 木 | 16:30-19:30 | Craig Hagerman |

| | | | | | |
|---|-------------|----------------|---|-------------|----------------|
| 金 | 16:30-19:30 | Craig Hagerman | 金 | 16:30-19:30 | Jamie Anderson |
| 土 | 13:30-16:00 | Jacobo Durbin | 土 | 13:30-16:00 | Gavan Gray |

b. Tutoring

Tutoring は、本学での学習方法の理解を深めることを目的として、予習・復習の具体的な進め方等のアドバイスをを行った。曜日・時間・担当者(卒業生)は以下の表のとおりである。

利用件数が年度途中で 2008 年度と比較で減少したことがわかったため、10 月末より専任教員が担当している「Grammar-2」で課題を課し、Tutoring を利用する形式をとった。その結果、一日あたりの利用件数が増えた。

今後は自主的に Tutoring を利用する学生が増えることが望まれるが、教員が後押しをするような機会を提供し利用者数を増加させる必要がある。

| 春 | 時間帯 | 担当 | 秋 | 時間帯 | 担当 |
|---|-------------|--------|---|-------------|--------|
| 月 | 16:00-20:00 | 田仲 由美 | 月 | 16:00-20:00 | 田仲 由美 |
| 火 | 16:00-20:00 | 安本 有佳里 | 火 | 16:00-20:00 | 後藤 綾那 |
| 水 | 16:00-20:00 | 後藤 綾那 | 水 | 16:00-20:00 | 秋山 文圭 |
| 木 | 16:00-20:00 | 田仲 由美 | 木 | 16:00-20:00 | 梶 祐実 |
| 金 | 16:00-20:00 | 秋山 文圭 | 金 | 16:00-20:00 | 安本 有佳里 |

c. Vocabulary Building

Vocabulary Building は、The Academic Word List の 570 語を身につけることという目的から、Integrated Units テキストに関する単語を身につけることに目的を変更し、一週間に一度新しい Word List を配付する形で行った。今後は利用者数の増加のために一層の工夫が必要である。

d. Grammar Exam Workshop

Grammar Exam Workshop は、基本的な文法の再確認を行い定着を図ること、テキストの文法項目を異なる角度から復習することを目的とし、定期試験前に Grammar 担当の専任教員が行った。

利用件数は、春学期 66 件、秋学期 9 件であった。

e. Phonetics 理論・Exam Workshop

Phonetics 理論・Exam Workshop は、Phonetics の理論理解のための総復習をすることを目的とし、定期試験前に Phonetics 担当の専任教員が行った。

f. Reading Exam Workshop

Reading Exam Workshop は、パラグラフやエッセイの構造、アウトラインの形式、エッセイの内容理解、Transition (つなぎことば) の用法、Summary の復習、Rhetorical pattern の理論と判別の復習することを目的とし、定期試験前に Reading 担当の専任教員が行った。

2) Study Skills & Tips at OJC-学びの手引き-の発行

学習サポート委員会が 2008 年度に実施した「学生の学習意識・実態基本調査」の結果、「大学での学び」のあり方を十分に理解していない学生がいることがわかったので、高等学校と大学での学びの違い、英語学習の四技能「読む・聞く・書く・話す」、ペーパーの書き方、プレゼンテーションの方法、それらの根底に必要な思考力・論理力を高める方法などをまとめた「Study Skills & Tips at OJC-学びの手引き-」を作成し、全学生を対象にオリエンテーションで配付、説明を行った。今後は学生がこの手引きを効率的に利用した学習指導・相談のサイクルを構築する。

4. 学生生活支援

1) 学友会活動支援

学友会活動について学生サポート推進部は「助言と協力」を基本姿勢に、学友会活動に

関するオリエンテーションを実施した。2009年度の活動方針を確認し、年間の活動計画として大学祭行事やアルバム撮影、カレッジリングなどのイベント企画の構成などに関わった。

また、執行部員の勧誘から学友会執行部と定例会を行い、日々の活動を把握しながら、リーダーシップの育成に努めた。年度末には1年間の活動のふりかえりを行い、新執行部への引継ぎを行った。

2)学友会活動と状況

執行部の構成は、短期大学2年生5名、短期大学1年生3名、大学2年生9名、大学1年生18名と40名近くの組織になった。ここ数年は、四大学生の執行部員が増えて、短期大学生の執行部員が減少している。大学生の人数が多い為、就職活動や編入学試験などで時間のとれない短期大学生を四大学生がカバーして業務に支障はなかった。

学生の自治組織としてのリーダーシップを学友会執行部の活動の中に育み、いわゆる「サークル活動」とならない為に、大学がいかに学友会執行部と関わっていくかが課題である。

3)大学祭について

学友会執行部が主催する大学祭は、「素敵女子1・2・STEP」と題して行われた。

大学祭の活性化を目指して、グラウンドに野外ステージを設営しステージイベントや、本学院125周年講演が実施された。2009年度より併設中学・高等学校が土曜日の授業を再開したことから、初日は午後まで一般入場が規制され、実質は1日半の実施であった。また、エコプロジェクトとしてのリユース食器利用は今年が3回目となり定着した。前述の野外ステージの設営や大学祭のプロデュースを企画会社に依頼し、大学祭をよい思い出として印象付けるようなディスプレイや企画を実施した。食べ物を販売する模擬店は多いが、大学生としての学習・研究・活動に関わる展示企画や催しは少なく、単なるお祭りとしなない動機の立ち上げが課題である。

4) 課外活動

今年度、活動しているクラブ・同好会は以下のとおりである。課外活動は大学学生と合同で行っているが、ここ数年、短期大学生の部員が減少している。

| 名称 | 部員数 | 活動回数 |
|--------------------|---------|------|
| ダンス部 | 2 (22) | 125 |
| ゴスペル部 | 1 (10) | 80 |
| Amigos de Apple 部 | — (—) | 36 |
| フォークソング部 | 11 (16) | 253 |
| バレーボール部 | 2 (9) | 29 |
| バスケットボール部 | 3 (16) | 29 |
| お洒落部 | 1 (7) | — |
| アルトス部 | 1 (7) | — |
| チアリーディング部 | 1 (8) | 110 |
| バトミントン部 | — (—) | 20 |
| ボランティア部 | — (—) | 14 |
| ブラスバンド部 | 2 (11) | 94 |
| 地球技部 | — (—) | 12 |
| 写真部 (青いレンズの会) | 3 (12) | 5 |
| 沖縄同好会 (ニライカナイ) | 4 (5) | — |
| フェアトレード同好会 (PEACE) | — (—) | 14 |

表中、()内の数字は併設大学の学生との合計人数
「-」の表記は、報告のないケース

5)奨学金受給状況

奨学金募集は、春学期3回、秋学期2回と昨年度よりも説明会を増やして多くの学生が応募できる機会を設け、本学の奨学生採用に関する基本的方針を伝えた後、応募方法について説明をした。生活サポート委員会を開催し、選考において決定した。2009年度、新たに採用された奨学生者数は以下のとおりである。

また、2009年度卒業生対象に奨学金返還の説明会を2回実施して、早期手続きに努めた。

| | 有資格者 | 採用数 |
|-------------------|------|-----|
| 予約奨学生(日本学生支援機構) | - | 42名 |
| 定期採用(日本学生支援機構)第一種 | 15名 | 10名 |
| 定期採用(日本学生支援機構)第二種 | 20名 | 15名 |
| 定期採用(学内貸与奨学金) | 23名 | 6名 |
| 定期採用(学内支給奨学金) | 15名 | 1名 |
| その他の奨学金 | - | 0名 |

5. 進路支援(キャリアサポートセンター)

1) 活動の概要

1990年代の就職氷河期時代にも増して、2008年9月の、いわゆるリーマン・ショック以降、2009年度も引き続き採用環境は厳しく、2010年3月の卒業生に至っては求人倍率1.62倍、大学就職内定率(2010年2月厚生労働省調査)では、80.0%、短期大学の女子は67.3%と、不況による企業の経営環境悪化により、非常に厳しい状況であった。

秋以降の厳しい就職環境の中で、教職課程履修者、大学編入学予定から就職に進路変更した学生などにとってはことさら厳しい就職活動を強いられる結果になった。

キャリアサポートセンターでは学生一人ひとりの決め細やかなカウンセリングを通じて、企業への適性や経営状況を含む企業研究を徹底させる取組を行った結果、80.7%(就職先決定者46名/就職希望の卒業生57名)^{注2}の就職率となり、全国平均を少し上回った。又、継続して就職活動を行うために卒業を留保した学生24名に対しては、3月に就職活動支援特別セミナーを設定した。きめ細かな指導をするため、2クラス編成とし3日間にわたって実施した。

注2: 卒業生108名の状況(就職46名、編入学38、専門学校1、アルバイト2、就職未定11、編入学準備2、留学準備1、その他7)

2) 具体的な取組

a. 職業意識醸成とキャリア形成支援のために(1年生対象)

しごとセミナー

将来の仕事についての認識を高めさせるため、エアライン業界、公務員、国際貢献などの仕事紹介と、それらの職業に就くためにどのような準備が必要か・・・をテーマとしたセミナーを6月～11月にわたって6回実施した。

b. 就職ガイダンス(1年生対象)

10月～翌年2月、短期大学1年生を対象として就職ガイダンスを12回シリーズで開催した。就職ガイダンスは以下のポイントに重点をおき、主として当センターのスタッフがインストラクターとなって実施した。依然としてガイダンス出席率の低い学生が就職活動で結果を出せないという現状もあり、ガイダンスの内容の見直し及び出席率を上げる策を検討する必要がある。

<就職指導のポイント>

- ① 企業から選ばれると同時に、こちらも企業を選ぶ視線をもつこと。
- ② 女性が長く働き続けることができる制度と文化をもつ企業を選ぶこと。
- ③ 学生一人ひとりの主体性を尊重する。

c. 卒業生のキャリアアップ支援(短期大学卒業生対象)

2006年度から取り組んでいる卒業生支援プロジェクトは、当センターウェブサイト以外で一切PR活動は行っていないが、毎月1-2名のペースで短大卒業生が転職相談に来校し相談に応じている。

d. 卒業留保生の支援

次年度も大学に在籍し、就職活動を続ける学生に対して、2010年3月に急遽特別支援セミナーを実施し、新年度の4月以降にも、特別支援セミナーなど、今後、卒業留保する学生に対しての支援策を打つ必要がある。

3) 2009年度卒業生の就職状況

就職希望者の2010年4月末現在の就職決定率は80.7%で、全国平均以上の成果を上げたものの、高い就職率を保てていない。

金融業界を中心として、一般事務職採用の四大生へのシフトが進行する中で、企業が求める採用要件が高くなり、不況下での短大生の就職環境は極めて厳しいものであった。

6. 編入学状況

今年度の編入学の合格者数は48名、入学者数は38名であった。昨年度の合格者数22名、入学者数19名に比べ、2倍に増加した。増加した理由として、夏期小論文対策講座等の支援策を新たに講じたこと、大阪女学院大学の編入学出願資格が整備されたことが挙げられる。

| | 大学名 | 学部 | 合格 | 入学 | (内指定校) |
|----|----------|----------|----|----|--------|
| 国立 | 京都教育大学 | 教育学部 | 1 | 1 | |
| | 三重大学 | 人文学部 | 1 | | |
| 公立 | 大阪府立大学 | 人間社会学部 | 2 | 1 | |
| | 大阪市立大学 | 文学部 | 3 | 3 | |
| | 神戸市外国語大学 | 外国語学部 二部 | 1 | 1 | |
| | 山口県立大学 | 国際文化学部 | 1 | 1 | |
| 私立 | 大阪女学院大学 | 国際・英語学部 | 10 | 10 | |
| | 関西外国語大学 | 外国語学部 | 2 | 1 | |
| | 関西大学 | 文学部 | 1 | | |
| | 関西学院大学 | 社会学部 | 1 | | |
| | | 人間福祉学部 | 3 | 3 | 1 |
| | | 総合政策学部 | 5 | 5 | 3 |
| | 関西福祉大学 | 福祉社会学部 | 1 | 1 | 1 |
| | 京都女子大学 | 現代社会学部 | 1 | 1 | |
| | | 発達科学部 | 1 | 1 | |
| | | 文学部 | 1 | 1 | |
| | 京都外国語大学 | 外国語学部 | 2 | 1 | |
| | 近畿大学 | 文芸学部 | 1 | | |
| | | 経営学部 | 1 | 1 | |
| | 園田学園大学 | 人間健康学部 | 1 | 1 | |
| | 桃山学院大学 | 国際教養学部 | 1 | | |
| | 同志社女子大学 | 学芸学部 | 1 | 1 | |
| | 同志社大学 | 文学部 | 2 | 1 | |
| | プール学院大学 | 国際文化学部 | 2 | 2 | |
| | | 国際文化学部 | 2 | 1 | |
| | | 合計 | | 48 | 38 |

VI. 研究

1. 機関リポジトリの構築

教職員、学生の教育・研究、学習成果を収集・整理・保存してウェブで外部に発信する機関リポジトリの構築準備を進めた。研究活動報告などを含む短期大学紀要のデータを収録した。

2. 研究活動委員会関係

1) 紀要発行

『大阪女学院短期大学紀要』第 39 号(2010 年 3 月 1 日発行)

(執筆者:専任教員 1 名 非常勤講師 2 名 本学専任教員との学外共同執筆者 1 名)

2) 研究会の実施

下記のとおり、学内研究会を実施した。

外部講師を招いての研究会(今年度は中止)

学内講師による研究会

実施日:2010 年 3 月 9 日(火)14:00~16:00

場 所:本学 会議室 I

対 象: 大学・短期大学 専任教職員、学生

(内 容)

題 目:平和ワークにおける芸術アプローチ

講 師:大学准教授 奥本京子

題 目:Achieving Immortality

講 師:大学教授 Steve Cornwell

題 目:古代キリスト教思想家オリゲネスの神学について

講 師:大学准教授 梶原直美

3. 専任教員の研究活動

1) 専任教員の自己申請により、『紀要』巻末には当該年の研究活動歴が個人別に[I.著訳書、II. 学術論文、III.その他の著作(報告、雑誌、新聞等)IV.学会発表、V.その他の発表(シンポジウム、講演、放送等)、VI.学会および公的な機関の委員、VII.科学研究費等の公的な研究補助を受けた研究]順に報告されている。

2) 教員の研究業績は、ホームページ上に公開している。

4. 民間等の研究補助を受けた研究

山田 一美 「日本人児童による英語の名詞句の解釈、及び語順の習得」 第 4 回博報 ことばと教育 研究助成事業(研究助成部門)(研究代表者) 2008 年 4 月~2010 年 3 月

5. 学会および公的機関の委員

本学ティーチングスタッフが担っている学外での主な役割は以下のとおりである。

Fujimoto, Donna

- (1) Program Chair, SIETAR Kansai
- (2) Publicity Chair, Pragmatics Special Interest Group, JALT
- (3) Coordinator, Contrast Culture Method Special Interest Group, SIETAR
- (4) Coordinator, Nikkei Gathering

McCarty, Steve

- (1) World Association for Online Education 名誉会長 2007年—現在に至る
- (2) Asia-Pacific Association for Computer-Assisted Language Learning 広報委員 2007年—現在に至る
- (3) ベネッセ コーポレーション Worldwide Kids English メーン監修 2006年—現在に至る
- (4) Child Research Net, Advisory Board Member, 2001年—現在に至る

中井 弘一

- (1) 大阪府立泉陽高等学校「文科省英語教育改善のための調査研究事業」 運営指導委員 平成21年4月～平成22年3月

関根 聡

- (1) 高槻市男女共同参画審議会 委員 2009年11月～2011年11月
- (2) 大阪市男女共同参画審議会 委員 2009年8月～2011年8月
- (3) 八尾市男女共同参画推進にかかる条例検討委員会 副座長 2009年6月～2010年3月
- (4) 高槻市男女共同参画センター 男性セミナー企画運営委員会 委員長 2009年4月～2010年3月
- (5) 学校法人池田五月山教会学園 評議員 2008年4月～2012年3月
- (6) 東大阪市社会福祉協議会:福祉と人権 推進委員会 オブザーバー 2005年11月～

Verity, Deryn

- (1) Japan Association for Language Teaching. Co-chair, annual international conference, November 20-24, 2009
- (2) JALT Teacher Education Special Interest Group, co-coordinator, from November 24, 2009

山田 一美

- (1) 日本第二言語習得学会 監査委員 2007～2009

6. 研究費の利用状況

大阪女学院短期大学の専任・特任教職員の研究活動に資するため、個人研究費と、特定の課題について共同して行う研究を助成する共同研究費を設定している。

個人研究費は、専任教員に対して年間50万円(旅費:20万円、旅費以外:30万円)、特任講師に対して年間20万円(内訳の設定なし)を限度に支給される。共同研究費については、審査を経て採否と金額が決定される。

2009年度は個人研究費のみが執行され、利用の傾向は2008年度とほぼ同等である。

| | |
|-------|-----------------|
| 予算: | 790万円 |
| 使用総額: | 397万円(執行率50.3%) |
| 内訳 | 消耗品費 168万円(42%) |

| | |
|--------|-----------------------------|
| 旅費・参加費 | 113 万円 (29%)…うち、海外旅費は 78 万円 |
| 機器備品費 | 72 万円 (18%) |
| 諸会費 | 35 万円 (9%) |
| その他 | 9 万円 (2%) |

VII. 社会的活動

1. 高大連携

2009 年度高大連携活動は 111 件 104 校で実施した。

プログラム

| | |
|----------------------|------|
| 模擬授業 | 42 件 |
| 進路全般講話 | 7 件 |
| 外国語・国際分野 | 23 件 |
| 学校説明 | 22 件 |
| 職業関連 | 11 件 |
| 大学コンソーシアム | 1 件 |
| 大学見学(市立中央高校) | 1 件 |
| 短大進学者への受験対策 | 2 件 |
| 面接指導 | 1 件 |
| オーストラリアへの語学研修者への事前研修 | 1 件 |

VIII. 管理運営

1. 組織体制

本学の教授会は、2004年度以来、学校教育法施行規則第66条の二に基づいて、教授会規程及び関係規程を定めた上で、教育研究および運営に関わる事項について審議してきたが、2008年度に新しい組織体制を導入した。2009年度には、前年度の組織運営状況とともに、本年度に決定された理事会組織の改革も踏まえ、更なる体制改革を推進した。

また、本学は二年制・四年制を一体の組織と考え、所属や担当科目の如何にかかわらず、それぞれの事業計画や課題への取組みについて共に検討する場としている。

今年度は、校務に関する諸事項を8つの部署で分担し^{注3}、各委員会の活動を取りまとめた。さらに、この8部署の運営を迅速に進めるため、基本的には、昨年設定したディレクターボードと副学長会を統合する形で、ディレクターミーティング(以下、DM)^{注4}を設定した。大学運営に係る意思決定事項を、①DMで基本となる考え方や方針を整理の上、教授会で審議・決定を行う事項と、②DM自体が運営に関する決定を行う事項に分類した。

注3: 大学教育研究推進部、国際交流センター、学生サポート推進部、運営管理部、学長室、継続教育センター、研究所、教員養成センター

注4: 構成する人員は以下のとおり

学長、学長代行、副学長、学長補佐、ALO、CLC、部長など計22名

2. 運営管理組織の整備と取り組み

2008年度までの体制を基本にしつつ、2009年度は学長の構想に基づき意思決定体制を再整備した。教授会メンバーの中から22名を選出しディレクター・ミーティング(以下「DM」という)を組織し、教授会規程に定められた審議事項の一部について、DMが審議行なうことと定め、教授会での審議事項についても、原則としてDMが予めその審議内容について検討した上で教授会に提出されることとした。これにより、審議あるいは重要事項の報告を小まめに検討・実施することが可能となり、学校運営に関する意思決定が迅速に行えるようになった。

加えて、中期的な視点に立った本学運営方針を企画し、業務運営状況を評価する部署として、学長室会を新たに設定した。

また、日々の業務の進捗に対して、プロセス管理・報告、改善への勧告、勧告の遵守を推進するコントローラー(学長補佐)2名を設定した。

これらの体制の整備により、今年度1年間の大学・短期大学部門の業務にPDCAの仕組みを確立することによって、事業計画の遅延等のリスクを極小化し、自己点検の結果を踏まえた組織運営の改善のための取り組みに結びつける、継続的な内部質保証システムを機能させようとしている。

3. 危機管理

1) IDカード

学院敷地内の安全を担保するために学院全体でスタッフのIDカードの携行を始め、専任職員についてはほぼ全員が携行するようになった。しかし、特に兼任講師を中心として、教員への徹底が不十分であるため、2010年度からは、キャンパス立ち入り時点で、IDカードの提示を義務付けることとした。ただし、学生を識別する有効な手段がないため、ICチップ入り学生証の活用など、技術的な可能性を検討する。

2) 安全避難訓練について

例年どおりの手順で災害緊急時(本館2階のトイレ付近からの火災を想定)の避難経路を確認す

ることを主に、安全避難訓練を実施し、グラウンドでの消火訓練では多くの学生が積極的に参加した。一年生は、アセンブリーの時間で出席者数を一定確保したが、授業がない3・4年生の参加が少なかった。

避難・消火訓練の後、中央消防署員により、AEDの使用に関する講習が実施され、職員や学生の有志約10名による実技演習が行われた。過去の実例を踏まえた具体的な対応について説明や質疑応答があり、学校内だけでなく通学途中の心がけなどについて意識が高まった。

3) 新型インフルエンザ対応について

新型インフルエンザの流行に対処するため、1週間の休講に加え、女学院全体の施策の一環として、非常勤講師や派遣社員を含む教職員全員に対して予防接種を勧奨し、教職員が病気の発信源とならないよう働きかけた。また、学生に対しても注意を強く喚起するとともに、教職の実習予定者や海外渡航予定者などに対する予防措置を推奨するとともに、発症した学生に対し出席・登校・課外活動を禁ずる一方、欠席により当該学生が学業・評価上の不利益を被らないためのルールを設定し運用を始めた。

IX. 財務

1. 補助金の獲得

2009年度の、私立学校振興・共済事業団を通して得られた公的補助金の獲得額は一般補助48,027千円(前年度54,240千円)、特別補助18,368千円(前年度9,421千円)の計66,395千円(前年度63,661千円)であった。2009年度から配分方式が変更された「特別補助」の比率は27.7%となっている。

上記の他、2009年度に新たに「大学教育・学生支援推進事業」学生支援推進プログラム(学生支援GP)として、「戦略的就職支援システム導入による就職サポートサービスの充実化」の取組を四年制大学と共同で申請し、採択され、総額で7,011千円の補助金を受給している。

なお、本学が採択を受けていた競争的な特別補助金の支給年限(3年間)が概ね2008年度で終わり、また、私立学校振興・共済事業団を通じた競争的補助金制度が廃止となったことにより、今後、私立学校振興・共済事業団を通しての特別補助額の上積みは見込むことができない。今後は、文部科学省を申請窓口とした新たなGP等競争的補助金の獲得が課題である。

2009年度に本学が受給した事業は以下のとおりである。

1) 教育・学習方法等改善支援経費(競争的特別補助金)

- a. 人に関わることの意味と自らの内にある生きる力に気づくリトリーの取り組み
- b. 異なりを越えて共生を考える「人権教育講座」の取り組み

2) 「大学教育・学生支援推進事業」学生支援推進プログラム

戦略的就職支援システム導入による就職サポートサービスの充実化

2. 財収改革

従来、募金活動は、卒業生とその関係者を対象とした「ウキルミナ・サポート教育環境整備寄付金」と新入生保護者を対象とした「教育環境整備支援特別寄付金」の2寄付金募集を実施してきた。しかし、2009年度は125周年記念募金運動との重複感がでないようにするため、学院全体の募金活動に統合し、短期大学独自で特別な募金活動は行わなかった結果、約70万円の実績となった。

X. 改革・改善

1. FD・SD

ティーチングやアドミニストレーションに必要なプロフェッショナルとしての幅広い職能を開発すること、さらには、掲げる教育目標を現実に翻訳し、これを実現する組織を開発すること。前者は「個人の教育力」を高める努力であり、後者は「組織の教育力」を強める取り組みである。FD・SD活動はこれら両面において不断に展開することが求められている。

本年度は、今日の多様化(価値観、能力など)する学生を前に、どのような学習目標や方法を設定し、期待する成果を上げるか。学士課程教育の根幹をなす「Learning Outcomes」に主眼を置き、授業改善の工夫について研究協議の機会を設けた。学生の参画(6名出席)を得たのは今回がはじめて。次年度は成果の確認、そのための評価指標・評価基準の設定について学ぶ計画をもっている。

2. 相互評価

福岡女学院大学短期大学部との第2回相互評価を行った。今回は「キャリア教育」をテーマに、両短期大学で自己評価作業を行い、2009年12月19日(土)に、本学において相互評価会を行った。それぞれの自己評価結果への質疑応答から、共通の課題として「キャリア教育」への取り組みについて討議を行い、報告書にまとめインターネット上に公開した。

URL: <http://www.wilmina.ac.jp/ojc/profile/disclosure/pdf/accredit02.pdf>

3. 各種調査

学長室が、各授業への満足度や各年次の学習生活・学生生活の状況を把握するために、年間を通して下記の調査を実施した。これらの集計結果は、前述の教育組織(各授業担当者及び担当委員会等)での検討資料としている。

1) 意識調査(4月)

新入生意識調査

2) 満足度調査(2月)

1年生キャンパスライフ・アンケート、チュータリング・アンケート、ライティングセンター・アンケート、図書館利用調査、2年修了時アンケート

3) 学生による授業評価

1年次英語統合科目(6月、7月、11月2月)
全科目・クラス(2月)